

『終わることのない年：六五年被害者の経験を理解する』 訳者あとがき

亀山恵理子

『終わることのない年：六五年被害者の経験を理解する』は、インドネシアの民間団体である「市民による研究アドボカシー機関」、「人道のためのボランティアチーム」、「インドネシア社会史協会」の三団体によって、2004年にインドネシアで出版された。長い間隠蔽されてきた歴史を語る本書が出版されると、その社会的反響は大きく、たちまち完売したと聞く。アジア現代女性史シリーズのなかの一冊として日本語版が刊行されることになり、編者であるジョン・ルーサ氏とアユ・ラティ氏は日本語版のための序章を新たに書き加えた。

これまで封印されてきた歴史をオーラルヒストリーの手法で描く本書の出版は、30年以上続いたインドネシアにおけるスハルト政権期の負の遺産に向き合う意味をもつ。

インドネシアが独立を宣言したのは1945年である。その後ふたたび植民地化を図ろうとするオランダとの独立戦争を経て、国家としての歩みをはじめた。1950年には議会制民主主義を導入し、初の議会選挙が行われる。だが、民族主義を掲げる政党、イスラムを旗印にする政党、そして共産党などが競い合い、内閣はいずれも長くは続かず、国内政治が安定しない状態が続いていた。

初代大統領のスカルノは、国内の政治的分裂状況が克服されない事態に直面し、1959年には「指導される民主主義」体制を発足させる。これは大統領個人により大きな権限をもたせる支配体制であり、それによってスカルノは、民族主義、イスラム、共産主義の三つの政治的潮流をひとつにまとめあげようと考えた。この時期にスカルノが喧伝した「ナサコム」(NASAKOM)は、ナショナリズム(Nasionalisme)、宗教(Agama)、共産主義(Komunisme)のそれぞれの勢力が一致団結して、困難な国政に対処しようというスローガンである。その後スカルノは、政治勢力として台頭しつつあった国軍をけん制するために共産党に接近した。反目する国軍と共産党の間でバランスを保ちながら、国政における主導権を維持しようとしていたのである。共産党は当時、国内では農地改革を実現するために農民の土地占拠運動を支援し、また対外的にはマレーシア連邦の成立を武力で阻止しようとするスカルノの考えを支持し、中国に近づいていた。国軍は共産党の戦闘行為を阻止しようと圧力をかけたものの、スカルノの庇護を受けていた共産党は勢力を拡大した。そして経済がますます悪化し、インドネシアの国民生活が困窮するなか政治的な緊張は頂点に達する。

そういった情勢下で、右派陸軍によるスカルノ打倒の動きを未然に防ぐためとして、大統領の近衛部隊が陸軍の首脳ら7人を誘拐、殺害した。9・30事件と呼ばれる出来事である。その後陸軍は、事件は共産党が起こしたクーデターであると発表して、鎮圧後には共産党に対する徹底的な掃討作戦を展開した。当時陸軍戦略予備軍司令官であったスハルト少将は、1966年にスカルノから全権委譲を受け、1968年には大統領に就任した。スハルトは共産党とその関係団体を非合法化し、中国との国交を断絶、そして外国からの投資や援助を受け入れる方針をとり、西側諸国から歓迎される指導者となった。つまり、9・30事件はインドネシアに大きな体制転換をもたらしたのである。

事件後にジャワ全土、およびバリで行われた虐殺については、実行命令の指揮系統や犠牲になった人びとの状況など、その全容はこれまで明らかにはなっていない。だがイスラム系青年組織などが動員され、少な

くとも20万人、多ければ100万人の人が殺されたといわれている。また150万人が逮捕、投獄され、多くの人びとは裁判もないまま、十数年の長きにわたって収容所での暮らしを余儀なくされた。釈放後も、「政治囚」としての烙印を押されるなど社会的差別を受け、本書で描かれているようにインドネシア社会のなかでさまざまな市民的権利を奪われた状態で生活を送ってきた。

強権的なスハルトの新秩序体制下では、それらの人びとが自らの経験を語ることは、非常に困難を伴うことであった。9・30事件後に成立した体制は、9・30事件は共産党によるクーデター未遂事件であったとする公式見解にもとづく歴史を、学校教育や記念碑の建設、映画製作などを通じてインドネシア社会に広めた。たとえばスハルト政権時代には、毎年10月1日に「9月30日運動／共産党の裏切り」という宣伝映画が国営放送で放映されていた。そして「共産党の裏切り」と「国軍の救済者としての役割」が喧伝されてきたのだった。

そのような状況に変化がみられるのは、30年以上におよぶ独裁体制が終わりを告げてからである。タイの通貨暴落に始まるアジアの経済危機はインドネシアにも波及し、国民の生活が経済的な苦境に陥るなか、それまでタブーとされてきたスハルト元大統領への批判が公然となり始める。学生らは政治、経済面での改革やスハルト政権の退陣を求めるデモを行い、インドネシア国内における民主化への機運は一層高まった。そして1998年5月にスハルト政権が退陣した後は、9・30事件に関する出版状況にも変化がみられる。スハルト政権下では発禁状態にあった9・30事件に関する書籍が出版され、またインドネシア共産党の著名人らの自叙伝などが発表されるようになった。『終わることのない年：六五年被害者の経験を理解する』が生まれたのは、この文脈においてである。

本書を共同で出版したインドネシアの三つの民間団体は、1990年代に設立された非政府組織（NGO）である。市民による研究アドボカシー機関は、人権分野で活動するインドネシアの代表的なNGOのひとつである。市民社会が力をつけ、民主的な政治機構がつくられることを目指して、これまでに研究や政策分析、キャンペーン、出版活動を行ってきた。人道のためのボランティアチームは、スハルト政権が崩壊する1998年5月に正式に発足した。当時は学生による抗議行動が活発化するなか、デモの物資調達や当局による暴力の被害者の支援に奔走すると同時に、首都ジャカルタを中心に発生したその政治的暴力の実態調査を行った。その後は学生など若い世代が中心となり、アンボンやアチェなどインドネシア国内の紛争地域での人道支援に携わった。インドネシア社会史協会は、主に歴史研究者から構成される団体である。本書の編者であるアユ・ラティ氏とヒルマー・ファリッド氏、またエッセイの執筆者のひとりであるラジフ氏は、同協会のリサーチャーである。

これらの三団体によって出版が実現した本書には次のような特色がある。

ひとつは、何よりもそれまで声をあげることのなかった、9・30事件で被害を受けた人びとの経験を掘り起こしていることである。インタビューでは、元政治囚の人びとだけではなく、その親戚家族、また殺害され、行方不明になった人びとの親戚家族も含めて260人に話を聞いている。市民のための研究アドボカシー機関の代表をつとめるアグン・プトゥリ氏は、被害者とは逮捕や殺害、虐待など、当局から直接に身体的暴力を受けた人びとだけではなく、その妻や夫、子ども、そして親戚家族もまたそうであるという概念を提示したことが本書の出版を重要なものに行っていると、インドネシアの有力紙『コンパス』のなかで述べている。

また本書の出版には、単に歴史的記録としてではなく、被害者である人びとが自らの経験を語る動きを一層進めようという意図がある。初版2,000部のうち半分は、市民による研究アドボカシー機関、人道のためのボランティアチーム、インドネシア社会史協会を通じて、9・30事件の被害者らが組織するネットワークに配布された。そこからさらに、まだ話をしていない被害者、つまり自らの経験をほかの人びとと分かち

もっていない人びとに本書は届けられた。被害者のネットワークが育ち、沈黙するのではなく声をあげるといふ、社会における「新しい文化」の創造を目指していた。実際に出版後には、本書を取り上げたラジオ番組で自らの体験を話す視聴者からの電話が数多くかかってきたという。

このほか、本書が若いリサーチャーによって書かれたことに触れておきたい。編者は、先に述べたインドネシア社会史協会の二名の歴史研究者とカナダのプリティッシュコロンビア大学で歴史学の教鞭をとるジョン・ルーサ氏であるが、被害者への聞き取り調査とエッセイの執筆は、主として人道のためのボランティアチームに参加する学生や若い活動家らによって行われた。2000年中旬から2001年にかけてインタビューが行われたとき、被害者のなかには市場のように自宅の外で話すことを希望する人もいた。六五年以降の出来事や自らのつらい経験を、子どもたちのいるところで話したことがなかったからである。またスハルトの新秩序体制は終焉したとはいえ、被害者らに対する社会差別はまだ終わってはいなかった。そのため話をすることが怖くなり、直前になってインタビューの約束を取り消す人もいたという。若いリサーチャーらは、聞き取りや執筆を通じて自らが育った社会が抱える傷に向き合いながら、世代間をつなぐ歴史の橋を築いていったのだろう。

訳者が本書を翻訳するきっかけとなったのは、2005年3月に開催された大阪外国語大学グローバルダイアログ研究会主催による国際シンポジウム『痛み、怒り、癒し～暴力と女性の語り～』（於：大阪大学中ノ島センターメモリアルホール）にレスタリさんというインドネシア人の女性が招待されたことである。オランダ植民地時代の1931年にジャワ島東部に生まれたレスタリさんは、「依然として抑圧されているインドネシア人民、とくに女性の運命をよくするために闘いたい」と強く思い、1951年から1965年まで本書でも触れられているゲルワニ（インドネシア女性運動）のメンバーとして活動していた。9・30事件以降は3年間の逃亡生活を送った後、東ジャワのプリタール・スラタンで逮捕され、その後11年にわたり投獄された経験をもつ。

当時通訳を務めることになっていた私は、大阪のホテルのロビーでレスタリさんに初めて会った。小柄で、滲み出るような笑みが顔に表れるレスタリさんだが、来日前に市民による研究アドボカシー機関のスタッフと共に準備した手記の中では、長い間離れていたために子どもとの関係は冷たいものになってしまったようだと言っている。そして義理の息子や娘でさえも、「元政治囚」であるために自分を家に迎え入れるのを怖がっているようだったと続けている。レスタリさんにとってはそのことが、最も心が痛む、9・30事件の影響だったという。

本書を訳し終えた今、2年前に出会ったレスタリさんの痛みをどこまで理解していたか、またそもそも、「六五年被害者の経験を理解する」とはどういうことなのだろうかと考えている。「痛み」は、どれほど想像力を働かせても、その人が感じるのと同じように自らもまた感じることは難しい。だが、他者の言葉に耳を傾け、その人がもつ痛みにできる限りの想像力を働かせること、そして異なる時代や場所に生きる私たちがそれぞれ置かれた位置から感じる自らの痛みに向き合うことは、六五年被害者の経験について理解する最初の一步ではないかと思う。本書はこれまで語られることが困難であった現代インドネシアの歴史に光をあてただけではなく、その一步を踏み出すきっかけを与えてくれる。

〈参考文献〉

アユ・ラティ「TUTUR PEEMPUAN: 女たちの語り—彼女たちの語りが私たちの歴史になる場所」アジア現代女性史研究会編集発行『アジア現代女性史』第2号（特集2：インドネシア・1965年）所収、2006年四月、66-74頁。 テオドラ・J・エルリーナ「文献案内：インドネシア1965年事件のなかの女性たち」